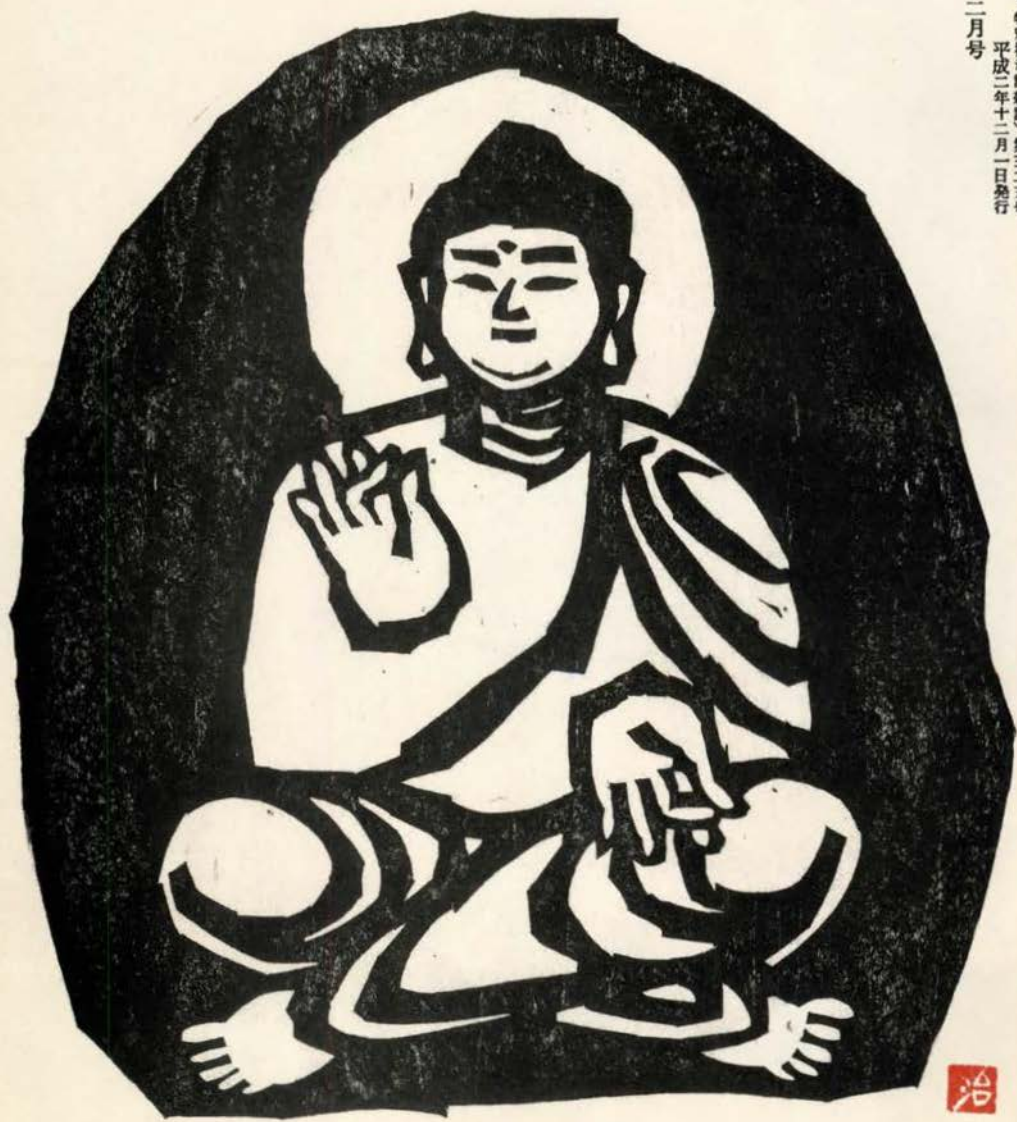


浄土

1990-12

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省特別授承誌補誌）第三二五号
平成二年十一月二十五日印刷 平成二年十二月一日発行
第五十六卷 十二月号





十二月の秀句

冬日和薦より高きもののなし

上林白草居

冬御空老いて召されしもの多し

水原秋桜子

父の忌の冬雲動くこともなし

津田汀々子

十二月号



深心と云うは、弥陀の本願を深く
信じて、……最後臨終の時、かな
らず弥陀の来迎にあずかる也。

——『念仏大意』

目 次

——随想(Ⅳ)——

威儀細(いぎぼそ)……………宮 沢 善 弘……(2)

——法 話——

年の瀬に思う……………長谷川 昌 光……(10)

《にこにこ法話》

けんかはやめて!……………長谷川 岱 潤……(18)

欣求庵主、河住玄先生のこと(下)……………金 子 寛 哉……(25)

季語やぶにらみ (8)

師 走 あ れ こ れ

……………木 下 隆 一 ……(34)

◇◇連載・話の旅(五)◇◇

超 常 物 語 ②……………松 浦 行 真……(41)

表紙絵 小林治郎画

(隨) (想) (Ⅳ)

威儀細 (いぎほそ)



みやざき
宮沢善弘

(横須賀市正観寺住職)

十月、『浄土』誌での随想を読んだ友人がこんな感想をもらった。

「今回の随想も、何時もながらのことだと思って読んだが、終わりになって『おん罰』などという前近代的な言葉が飛び出してきたので驚いた……」と。

言われて気がついたが「罰(ばち)があたる」という言葉をこの頃あまり耳にしない。

事実、若い人達の会話の中では殆ど聞けず、これは死語化しているのだろうか。

神秘、ご利益（りやく）、罰（ばち）などの語は、正直いって、興味の対象にはなっても、日常生活の中では非科学的な言葉となっているのだろうか。

しかし、そういうことでいいのだろうか。

このシリーズでの、私の随想の深層を流れるものは、実はこの問いかけなのであった。

『神や仏を信じない』という人がいる。私はこれを、ある推測をもって是認する。

信じるものを外に何かもっているのだろうと推測するからである。

だが一方、『私には宗教などない』という考えには予ねて賛同する気になれない。

デカルトを批判したパスカルのことをのべたのも、人の怨念の神秘にふれたのも、人間原理宇宙論について書いたのも、すべてがそれに関わりを持つことなのである。

特に前回の『人間原理宇宙論』は、『なぜ宇宙は存在するのか』『なぜ宇宙の物理定数はこうなのか』を、原因から結果を考えるという普通の思考の筋道によらず、今ある結果（現実）を出発点として前代未聞の論理を展開しながら、これこそがその元（原因）に達する道なのだと、人間の限りない有限性と可能性とを立証していくことであった。それを説明する驚くべき例文をひとつ引用してみよう。

『例えば、この宇宙における重力定数……この数値が現在のものよりほんの〇・〇〇〇〇〇

年九十五歳。終世念仏を高称して明け暮くれた此土から西方極楽に旅立った。戦前は、巡教師（浄土宗で地方各地を巡った説教師）で留守がちな父に代り、檀家の法事には本堂で鐘をうち、木魚をたたいてお経を上げた。その内助の様子をもう少しのべると、第二次大戦の末期には四人の息子のうち二人（私と弟の長野県諏訪市貞松院住職山田和雄）を軍隊に送って動かすことがなかった。

戦後、私はソ連に抑留されて二十三年まで居らず、父母は弟妹を大学・高校に学ばせるために米を担ぎ、野菜を負い、そして潮を焼いて塩を製しそれを物と交換して強靱に生きた。

しかし、檀信徒や地域の人々には優しく尽くして、人に愛され、晴耕雨縫、無類のお祭り好きで暇があればご詠歌を唱し、詩を吟じて陽気に生きた。

父が遷化してまる七年、ここで母を失い六十八歳を間近にして私は、初めて親離れしたという実感に浸った。ひと月が過ぎてその初月忌を迎えた日に急に気が向いて、今迄七年間も手をつけずにおいた、父の大事な書類ダンスの引き出しを引いた。

最初に目についたのは、画仙紙を筒状に巻いてコヨリで結わえた揮毫らしい沢山の物だった。その上には、古ぼけたノリ入れでくるんだ横二十五センチ縦四十五・六センチ程の写真のような物が載せてあって、上書きには『元祖法然上人御真影』と、見慣れた父の字

で墨書されていた。

包み紙をといて見ると、それは法然上人七百五十年大遠忌法要記念（昭和三十六年三月）に総本山知恩院が出版配布したものであった。

薄紙の添付説明書にはこうあった。

京極権大夫隆信筆

法然上人御真影

原本知恩院所蔵

『……常に上人の人格を景仰し、念仏の信仰に生きるものは、よろしく座右に懸けて、恭敬尊重すべきである』と結ぶこの説明書によれば、『この御影（みえい）は数ある法然上人の御影の中で、代表的なもので、墨染の法衣をまとわれた上人が「往生要集」を講義されているお姿を表わしている。「法然上人行状書図」第十に「御白河法皇、勅請ありければ、上人法住寺の御所に参じたまひて一乗円戒をさずけ申されけり。（中略）法皇は上人の講義に感激されて）御涙はなはだしかりけり。御信仰のあまり、京極権大夫隆信朝臣（当代肖像画の名手）におほせて、上人の真影を図して、蓮華王院（京都の三十三間堂）の宝蔵におさめられ

る。先代にも、その例まれなる事ぞと申しあへける』と、その典拠の確実なることを述べている。

原本は、絹本著色画、紫地印金赤色金襴表具、金軸縦四七・五センチ、横二八・五センチで、この模写は原本よりやや小さく、精巧典雅、絹目写真プロセス版十数度摺で、上人の相好が誠に瑞巖にえがかれ、真に迫るものがあるとも述べている。

父は、常時座右に懸けておくのがモットイなので、最も大切な物を保管した文庫の内に秘藏したのだと思う。

母の初月忌にあたって、これほどに尊い御影（みえい）が拝め、元祖様の御真影をかほどこに間近く拝せることをどうして予想できたろう。唯々ありがたい不思議のお引き合わせと思う外にない。

これをどうして偶然の出来事などと思えよう。私は元祖様の御真影をとおして、その奥にハッキリと父の目を見、母の微笑を見た。

やがて心の落ち着きを得て、再び静かにお姿の全貌に目を展べ、着けられるお袈裟に目を留めた。そこには初めて気付く一つの驚きがあった。

浄土宗宗侶は略式に威儀細という袈裟をつける。この袈裟の元は、中国は唐の有名な則天武后が五条袈裟を縮小して禪僧に与えたことに始まるといわれる、いわゆる絡子（らくす）または掛絡（から）掛子（かす）などとよばれるものである。それが浄土宗にどうして伝わったのか。絡子と威儀細と時宗でもちいる前五条の違いなど、これらのことは時を改めてのべようと思うが、ただ、浄土宗に伝わった時期について『浄土宗大辞典』Ⅰの五六頁に「一三世紀初頭（正治年間）」とあるが、これは「一六世紀（弘治年間?）」と改むべきだろう。

私が何に驚いたかというと、元祖さまが着けられているお袈裟の威儀（紐）は、クッキリとしていて、拝する私の目を射るような極めて鮮明な描写であることにあった。

元祖さまの御影は、『御伝』の絵図や『足曳之御影』、その他等々、数多く色々拝見してきた。しかしその威儀（紐）の様子については、見てはいても一視野におさめた一ぶくの絵の中に拝して、特に威儀（紐）の部分だけをクローズアップし、そこに注目するという見方はしていなかった。恥ずかしながら、私はそういう大ざっぱな拝し方しかしていなかったことをこの際告白しなければならない。

不覚にも見過していた、と、そのことに今気付いたのだ。その衝撃は『目を射る』よう
なと表現したそのことなのである。

今日私達が用いる威儀細の由来は一般に伝えられるとおりかも知れない。だがその形の
由来はともかくとして、威儀細の「こころ」のルーツは、日常のご衣体を写したこの御真
影の中に求めらるべきであらうと、その気持が強くなった。

改めて言えば、先ずはその威儀（平くけの紐）の細さにある。その衣体の生地の粗末さ
にである。そこに見るお袈裟の如法な被着法・偏袒右肩（へんだんうけん、左肩から右脇へと
斜めに着けること）にある。

最近とみに金襴・絢色をよろこび、威儀太を好む傾向に堕する私は、それによって「僧
の真の威儀を細く」している自らを顧み辱深の思いに駆られている。

道元禪師の「正法眼蔵」一〇六に『……仏祖正伝の衣法を見聞せしめん』とあるが、元
祖さまのこの衣法こそ浄土宗侶の正伝でなくてはなるまい。

父母が最期に遺した厳しい戒めと思えば、改めてその不可思議功德を畏れるばかりであ
る。

△法

話▽

年の瀬に思う

は
せ
が
わ
し
ょ
う
こ
う
長谷川 昌 光

(横浜市光安寺住職)



私達の住む日本は地球の中緯度、気候帯で言うところと温帯に属し、大変恵まれた位置にあります。一年は春夏秋冬の四季に分かれ、それぞれの季節には折々の自然美とそれぞれの情緒を提供してくれま

す。春には花や若葉をめで、夏は照りつける太陽のもとで南国にいるかの様に夏のレジャーを楽しみ、秋の紅葉に感嘆し、冬には雪や氷の中に静寂の景色を楽しみます。また夏の服装から冬の毛皮に至る

まで季節の移り変わりに従って副広いフ
ァッションを楽しみ、折々に旬の味に出
会うこともできます。この国に生まれ育
った私達は、こうしたことがあたりまえ
のことであるかのように一年を過ごして
いますが、地球上には四季の変化のない
地域で暮らす人も多いことを思うと、こ
の豊かな自然の中に生まれ、生かしてい
ただいていることの幸せに感謝せずには
いられません。

ところが最近、私達の生活の中では次
第に季節感が失われつつあります。夏は
涼しく、冬は暖かな室内での生活が多く
なり、浴衣に団扇の夕涼みなどという夏
の光景も少なくなってきました。一方
食生活をみると、これもまた栽培技術や

方法、冷凍技術の発達などによって季節
に関係なく、年間を通して食べられる野
菜や果物が多くなってきました。食べ
たいものがいつでも食べられることは嬉
しいことですが、反面、旬のものをその
時期に味わうという感動が少なくなっ
てきていることも事実です。こうしてみ
てくると、文化の発達とともに私達の生活
は自然のまま、自然の中での存在から離
れてきているのではないかとも思われま
す。

何はともあれ、今年も自然の営みの一
サイクルの経過とともにカレンダーは一
枚を残すのみとなりました。

一月も十二月も一日に始まり三十一日

に終わる同じ一カ月間ですが、これを迎えて過ごす私達の心の持ちようには対称的なものがあります。言うまでもなく一月は新年を迎え、年とともにすべてのものが改まった感じで、何歳になっても新年を迎える毎に「こころざし」を新たに歩みを進めていくという心境になります。十二月も実は一月と全く同じで、毎日が未だ経験したことがない新しい未来に向かって歩みを進めているわけですが、私達の心持ちというものは、その置かれた立場や時期によって様相は異なってくるものです。十二月を迎えると、私達は前を見ることよりは、この一年の間に後ろに残してきた足跡の存在が気にかかるものです。

この一年を振り返ってみますと、整然としたよい足跡を残してこられた人もあるでしょうし、自分ではよい足跡を残してきたつもりが、振り返って見ると、そこには乱れた足跡が残されていた人もありましょう。振り返らずともつまずき、倒れ、あるいは横道にそれ、回り道の足跡を自覚している人もあることと思います。

私は学生の頃からスキーが楽しみで、雪のシーズンを待つては今でも出掛けて行きます。今では周囲の景色を楽しみながらのんびりとゲレンデを滑り降りていますが、若い頃は早く上手に滑れるようになりますと、講習で習った技術をマスターすべく必死に練習をしたものです。

ところが、実際に滑っている時は、自分では自分が今どのような姿（フォーム）で滑っているのか全く分かりません。体の向き、腰の位置、足の運び等々。ところが滑り終わって振り返り、滑り降りた跡（シュプール）を見ると、それが分かるのです。無理なくスキーの捌きができ、よい姿勢（フォーム）で滑った時はきれいなシュプールが残っているのです。反対にうまくいかなかった時は当然乱れたシュプールが残ります。従って一回一回の滑り跡を確認しながら次の練習に備えたものです。今でもその時指導者が繰り返しの口にしていた言葉を思い起こします。「シュプールを大切にする人は上達が早い」と。

私達の日常生活における足跡は、スキーのシュプールのように目で確認できるような形では残りません。それは一人一人の心の中に残されていくものであるからです。自分でしか分からない足跡です。一月には「ころざし」新たにスタートした私達です。一年の終わりにあって自らその足跡を心に問うてみる必要がありますであろうと思います。私達凡夫の生きざまは、他人から強制されることなく、自らの心で「ああもしよう」「こうもしよう」と前向きな「ころざし」を持ちながら、これを実生活に反映し、実行していくことの難しさを感じる存在です。この一年自分の歩んで来た跡を振り

返った時、知らず知らずのうちに安易な生き方に走り、利害損得に左右され、種々の誘惑に惑わされてきた足跡の存在に気がきます。

一年間には良きことばかりあるわけではなく、また、悪しきことばかりでもありません。良きもあり、悪しきもあります。願わくば良きことは明日への継続を願ひ、悪しきことは明日に向かって改め正していききたいものです。古来より年の瀬に行われている各種の行事や儀式はみなこの思いから行われているものだと思います。

毎年十二月に入ると職場やいろいろな仲間が集まって忘年会が開かれ、夜のネ

オン街は大変な賑わいとなります。日本では「年忘れ」という言葉は室町時代頃より使われ始めたと言われていますが、毎歳年の暮れに親戚朋友が相集って、年中の労を忘れ、共に息災を祝い合ったと伝えていきます。

また、中国では別歳、分歳という字をあて、共に「としわすれ」と読み、旧年と別れ、旧年と新年とに分かれるこの時期に「年忘れ」の宴を開いたと伝えられています。気心の知れた仲間が集まり、酒や料理を楽しみながら一年の疲れを取り去り、身心快楽になって新年を迎えたいと思うことは、昔の人も現代の私達にも共通した願いであらうと思います。ともによりよい来年に向かってスタートす

るための心意気の宴なのです。

また年越しの行事として「除夜の鐘」が作り出す雰囲気には特別なものがあります。鐘の音とともに年を送り、新年を迎えるのです。今では家に居てもテレビを通して目と耳で、ゆく年を感じさせてくれるものです。

ところで、鐘の音はこの一年間に意識するとしなにとに拘わらず、浮かんでは消え、消えては浮かんできた多くの煩惱を、一突き一突きの鐘の音に思いを込めてこれを消滅させていくものだと言われていますが、実は百八の回数是一年の十二ヵ月、二十四気、七十二候を加算した数だということです。即ち、一年を三十

日づつ等分したのが十二ヵ月、十五日づつ等分したのが二十四気、（立春、夏至、秋分などの二十四節気）、五日づつ等分したものが七十二候です。言うならば百八という回数は一年間の日数を意味する数であり、再び戻ることのない一年間の日々を愛惜の念をもって送ることなのです。心に響く鐘の余韻の中に過ぎ去った日を想い、煩惱の炎を鎮め、やがて来る新年に思いをつなげていくものなのです。

私達は顔や手足が汚れるとすぐに洗って流します。毎日風呂で身体の汚れも洗い流します。このように、目に見える汚れはその都度洗い清めることが出来ますが、心の汚れにはなかなか気付かず、こ

れを洗い清めることは困難なことです。

一年間の月日は心の中に多くの汚れを持ち込んでいるはずですが、気付かぬうちに心の内も汚れてきているのです。この心に積もった汚れをみ仏の前で洗い清め、新年に備えるものに仏名会があります。

この法会には仏名経に「若し善男子、全女人仏名を受持すれば、現世安穩に諸難を遠離し及び諸罪を消滅し、未来に当り阿耨多羅三藐三菩提を得べし……」とある所説に従って行うもので、懺悔滅罪を祈念するものです。

年忘れの会といい、煩惱を滅するため除夜の鐘といい、懺悔滅罪を願う仏名会といい、いずれも私達凡夫がこの一年

間に積み重ねてきたマイナス面を取り除くための行事、儀式という性格が強く感じられます。言わば今までのマイナス面をすべて取り除くことによって、再びゼロの状態に戻し、もう一度みんな揃ってスタート台に立たせていくためのものであらうと思います。失敗や多くの煩惱、造罪があったからと言って切り捨て、見捨てることなく、揃って再スタートを切るための方策なのです。

「願共諸衆生 往生安樂国」——総ての人が手を携えて、共に歩んでいきましよう。一人の落伍者もないように——年の瀬の行事は私たちにこんな呼び掛けをしているもののように思います。

◎維持会員へのご加入のお願い

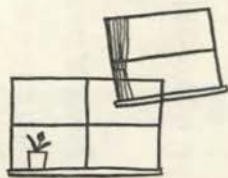
法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十六巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

にこにこ法話

けんかはやめて！



はせがわ たいじゅん
長谷川 岱潤

(東京・品川区戒法寺住職)

暮れも押しつまった放課後、ミーちゃんたちのクラスでも、班ごとに分かれて大掃除をしていました。

「拓郎、何さっきからグズグズやっているん

だよ。おまえのところが終わらないと先に進めないじゃないか」

「お前みたいなグズとは付き合ってられないよ。残りはおまえが一人でやれよな。俺たち

は外で遊んでいるからよ」

健君たちは怒鳴りつけるように言う、教室から出て行こうとしました。

「待てよ、そんなのひどすぎるじゃないか」

違う班の徹君が、見かねて健君たちを呼び止めます。

「徹、何だよ、俺たちに文句あるのかよ」

「けんかうるって言うのなら、やってやろうじゃないか」

健君たちは、徹君をこずき回しはじめました。

「徹、ほら、手を出せよ。俺たちに文句あるんだろ」

「僕は、君たちとけんかなんかするつもりないさ。ただ、拓郎君と一緒に掃除をしろと言いたいだけさ」

「それが、けんかをうっているって言うんだよ。さあ、相手になるからかかってこいよ。それとも、かかってくる勇氣はないのかよ、この弱虫」

健君たちはいいように徹君をこずき回しますが、徹君はやられるままになっていました。「あなたたち、やめなさいよ」

トモちゃんが、悲鳴のように叫びました。ミーちゃんは、一度廊下に出ると、すぐ戻ってきて、

「先生が来たわよ」

と、大声で叫びました。

「ちえ、行こうぜ。徹の弱虫、弱虫」

健君たちは外に出て行きました。

「余計なことするなよ」

徹君は、ミーちゃんにむすつとした顔で言

うと、やはり出て行ってしまった。

「なによあの態度。せっかく助けてあげたんじゃないねえ。御礼の一つ言ったって罰当たらないわよ」

トモちゃんが、徹君を見送ったミーちゃんの後ろに近ずきながら言いましたが、ミーちゃんはとてもさみしい気持ちになってしまいました。

やがて掃除も終わり、ミーちゃんたちも家に帰りました。トモちゃんとも別れ、ミーちゃんももうすぐ家というとき、徹君が角から出てきました。

「さっきはごめん」

そう言うと、徹君はうなだれたまま行こうとしました。

「待って、私こそ余計なこととしてごめんね。」

徹君に恥じかかせちゃったもんね」

「いいよ。そんなふうに言ってもらうとうれしいよ。俺、父ちゃんから、男は手を出したら負けだって、いつも言われてるから、出せなかったんだ」

「偉いんだね、知らなかったわ」

「ううん、本当は手を出したらもっとやられてしまうから怖くて出なかっただけ。ありがとう、それじゃね」

徹君の後ろ姿が、とても晴れ晴れと見えました。ミーちゃんも、嬉しくなって元氣よく家に飛び込んで行きました。

その晩、夕ご飯も終わり、お母さんと後かたづけをしていても、ミーちゃんはずっと嬉しそうにしていました。

「ミーちゃん、今日、なんかいいことあった

んでしょう」

「別に、いいことじゃなくてね。けんかになっちゃって大変だったんだよ」

「そんなふうには見えないわねえ」

「本当だって、拓郎君が掃除がのろくてさ、健君たちにいじめられてたの。それを徹君がかばってさ。乱暴者の健君たちと徹君がけんかになっちゃったの。でもね、徹君どんなに健君たちに乱暴されても、一度も手を出さなかったんだよ。でも、怖くて出さなかったんじゃないんだよ。ね、すごいでしょう」

「へえ、偉いわね」

「お母さんも偉いと思う？ 徹君はね、いつもお父さんから、手を出したほうが負けだと言われているんで、出さなかったんだよ」

「徹君って、ミーちゃんの彼氏なのかい」

隣で聞いていたおとうさんが話しに入ってきました。

「そんなんじゃないわよ。ただ偉いなあと思ってただけよ」

「そうか残念だな、彼氏だったらいいなあと思ったのさ」

「え、どうして」

「だって、徹君は今日、ミーちゃんに二つも大事なことを教えてくれたからさ」

「二つ？ 一つは手を出したほうが負けっていうことよね。もう一つは何」

「拓郎君のことさ。人はみんな違うということ、その人の仕事がたとえ遅くても、のろまだとか、グズだとかって言うてはいけないということだよ」

「でもさ、本当にのろいと頭にきちゃうのよ

ね。私なんかも、わかってるんだけど、つい『早く、やってよ』なんて言っただけなん。徹君って偉いね」

「人はそれぞれ違う、だから優しさや思いやりもその人その人で、かけ方、仕方が変わらなくてはいけないということだろうね。この間お父さんが聞いた話に、こういう話があったよ。それはね、あの動物記を書いたシートンさんの晩年の話だそうだけどね、

——あるときシートンさんが畑を耕していると、一人の旅人が通りかかったそうだ。

『すまないが、次の町までどれくらいかかるかなあ』

シートンさんは、顔を上げ旅人の顔を見るとぶっきらぼうに言った。

『歩いてごらん』

旅人はその言葉にむかっときた。ていねいに聞いているのに、歩けとはずいぶん感じの悪い年寄りだ。まあいい、無視して行こう。

旅人がそう決めて、少し歩いたとき、後ろからシートンさんが旅人を呼び止めた。

『あなたさん、ずいぶんと疲れているようだね。それに右足にけがをされているようだ。その歩き方では、そうだなあ、四〇分はかかるじやろう』——

いい話でしょう。お父さんはとっても感心したんだよ。人はみんな違うということ、だから相手をよく見て思いやりを持たなければ、意味がないということ、よく覚えておいてね」

「はくい。でもさもう一つの方なんだけど、本当はちょっとわからないんだ。どうして手

を出したら負けなの。トモちゃんなんか後で言つてたけど、あのとき徹君が一発パシッとやってくれたら、どんなにか気持ちよかつただろうに……」

「おいおい、怖いことを言わないでくれよ。暴力を認めたら、それがどんなに正当な理由があつたって、仏様の教えには反することになるよ。いいかい、暴力を使うのは、人間として最低のことなんだよ。ほら弱い犬ほどよく吠えるって言うでしょう。弱い人間ほど暴力を使ったがるものなんだよ。言葉ではかなわないから手を出すんだね。確かに暴力で争えば、その時決着ははっきりするでしょう。でもどうだろう。やられた方が黙っているだろうか。たとえば徹君が一発やって、健君たちをのしちやつたとするよ。そうしたらどう

なる。健君たちは黙っているだろうか。怨みに思つて、またいつかけんかになるんじゃない。お釈迦様の有名な言葉に、

『この世の中では、怨みは怨みによって決して静まるものではない。ところが怨みは怨みなくして静まる。これは永遠の真理である』

というものがあるように、暴力では決して最終的な結論は出ないんだね。だから暴力を使つても、何の解決にもならない。ただ暴力を振るつた人間が、だめな人間として信用を失う、つまり人生に負けるということ、徹君のお父さんは正しいことを言っているし、それになにより、それを実行している徹君は大した男だと思ふよ」

「へえ、そうかなあ」

「あなた、何顔赤くしてるの」

「赤くなんかなくてないわよ。でもさ、正当防衛っていう言葉あるじゃないの。あれは間違いの、徹君はやられっぱなしだったんだよ」

「間違いだね、少なくともお釈迦様の教えによれば、どんなに正当な理由があっても、暴力で答えたら間違いだと思うね。だから徹君は手を出さなかったんだ。理由や状況ではないんだよ、暴力がいけないことなんだよ」

「でも、そんなこと言ってたって、殺されそうになっちゃったらどうするの」

「逃げるしかないんじゃないか」

「殺されるか、殺すかだったら」

「殺すより、殺される方を選べと仏様は言っているよ」

「私そんなのやだ。お父さんも徹君も死んじ

やうじゃない」

「そんな極端なこと考えるなよ。テレビドラマの見すぎだぞ」

「だって」

「でもそれが仏様の教えだ。そしてそれこそが、この世から争いをなくす唯一の方法なんだよ」

「今年は国会でも、物騒な論議がありましたからねえ」

「武器を持って戦争の協力に行ったら、争いは治まらないだろうね。不戦の誓いのある国なのだから、戦争には協力しないという勇氣を持って、今こそ仏様の教えを実行してほしいね」

「本当ですねえ」

欣求庵主、河住玄先生のこと (下)



金子寛哉

(大正大学講師)

(三) 漢詩中に見る信仰的感懷

『梅窓書屋詩稿』の漢詩は次のような
七言詩で始まっている。

○大正十二年癸亥 十五歳

題「嵐峽紅葉園」

嵐山楓葉映溪紅 渡月橋邊碧水通
縷縷炊煙古梵刹 唯看秋景一園中
嵐山の楓葉 溪に映じて紅なり 渡
月橋邊 碧水通ず 縷々たる炊煙
古梵刹 唯看る秋景 一園の中
この外沢山の漢詩が年代順に収録されて

おり、それらの詩稿を一つ一つ読み進む
ことによって、その折々の先生の感懐に
ふれることが出来る。それらの中から仏
教に関わる詩を幾つか拾い出してみると
次のようになる。

○昭和六年辛未 二十三歳

平林寺参禅在_二埼玉県野火止_一

禅刹_{ぜんさつ} 平林寺 秋光法堂_{はつどう}に映ず 閑庭

人到らず 鐘声 木犀_{もぎ}香る(漢文省略以

下同)

○昭和三十年乙未 四十七歳

初到_{はつと}雲巖寺_{いんがんじ}

数里 禅刹_{ぜんさつ}を尋ぬ 溪声 老樹の間

ただ 苔石_{たいせき}の滑_{なめ}かなるために俗人の攀

づるを許さず

仏国 開山の寺 星霜 幾徂_{いくそ}徠_{らい} 遺蹤_{いしよう}

聞くこと久し 今日 青苔を掃ふ

祠堂 深く鎖_{くわ}す萬山の中 溪おのづか

ら淙々_{そうそう} 樹おのづから紅_{くれなゐ}なり 一段の

靈光 心不昧_{ふまい} 秋風落日 師翁_{しろう}を礼_{らい}す

これらの詩は、先生が禅に傾倒していら
れた頃の心境を記しているように思われ
る。これは又先生の著作中に『仏国国師

家集』(S 30・11)、『仏国国師』(S 31・

11)、『元庵と無学』(S 40・2)、『仏応禅

師』(S 40・4)、『東山法嗣伝』(S 42・8)

等の書があることから理解出来る。

次に先生が六十歳以降、浄土の念仏信

仰に帰依するようになって後の詩を幾編か拾い出してみることとする。

○昭和四十六年辛亥 六十三歳

歳旦口占

韶光、吾徒らに老い 新正 斯の生を
愧づ、臘雪 天然に白く 早梅 分外
に清し 停雲 友を思ふ処 風木 親
を慕ふ情 今且 寒庵の裡 欣求 仏
名を念ず

○昭和四十八年癸丑 六十五歳

歳晩書懷

また歳晩に逢うて斯の生を愧づ 煩惱
場中、何事を成ぜる 六十五年 人老
いんと欲し 欣求浄土 出離の情

○昭和五十一年丙辰 六十八歳

念仏偈

四大軀となり五蘊は心 煩惱場中
に苦吟す 専修の念仏 欣浄の意 唯
信ず 弥陀弘誓の深きを

○昭和五十二年丁巳 六十九歳

先妣十三回忌辰

七十の生涯 萬事むなし 唯悲しむ父
母の恩 窮まりなきを 都て不孝 今
生の恨みをもって 帰命す弥陀 誓願
の中

○昭和五十三年戊午 七十歳

歳旦口占

児孫 老を扶けてまた春に逢ふ 鳥語

花容、坐ろに新を喜ぶ 畢竟生涯 煩

悩の業 欣求庵裡 古稀の人

これらの詩の中から各年代における先生の念仏信仰に対する境涯をうかがうことが出来るように思われる。「欣求庵裡古稀の人」はすでに傘寿も過ぎ、今もお元気に自らの信念の趣くままに法然上人の境涯に近づこうと著述の仕事にはげんでいる。

(四) 著書を通して見る浄土信

仰の軌跡

先にも述べたように先生には沢山の自家製の著書がある。ここでこれら全ての

著作名を紹介する紙幅はない。今はそれらの中から主として浄土宗に関わる著作を刊行年時順に配列し、それを通して先生の浄土宗の念仏信仰の軌跡をたどって見たいと思う。

少し冗長になるが、六十歳で心機一転して以来のその形跡を見る上から意義があるのではないかと思われるので、出来るだけ丹念に記して見たいと思う。

『蓮生法師集』

一冊 S 43・3

『一言芳談欣求抄』

二冊 S 44・3

『婦命本願抄集説』上

一冊 S 44・9

『復婦命本願抄要解』

一冊 S 45・3

『婦命本願抄』

一冊 S 46・4

- 『婦命本願抄註集疏』 六冊 S 46・4
『蓮生法師集』 一冊 S 46・11
『信生法師集』
『西要抄註集疏』 二冊 S 46・12
『校訂西要抄』 一冊 S 47・2
『向阿上人全集』 二冊 S 47・5
『父子相迎診註集疏』 三冊 S 47・10
『蓮生法師集私註』 一冊 S 48・2
『浄土宗名越派資料集』 一冊 S 48・5
『浄土宗古系譜』 五冊 S 48・8
『浄土宗円通寺文書』 二冊 S 48・11
『一言考談索引』 一冊 S 48(稿本)
『一言考談・一口法語対照表
浄土三部仮合抄言釈索引』
『一枚起請文私考』 一冊 S 49・4
『黒谷上人語灯録の解説』 一冊 S 49・11
『再訂蓮生法師集私記』 一冊 S 50・7
- 『校訂宗派流伝』 一冊 S 50・11
『元享刊複印黒谷上人和語灯録』 四冊 S 51・6
『延応刊複印選沢本願念仏集』 一冊 S 51・7
『延享刊複印和字選沢集』 三冊 S 51・10
『元久刊複印選沢本願念仏集』 一冊 S 52・12
『再訂元久刊選沢本願念仏集』 二冊 S 52・2
『古本複印選要訣
一枚起請文異文攷』 一冊 S 52・10
『真宗延書本複印選沢本願念仏集』 二冊 S 52・12
『選沢集の研究』 四冊 S 53・7
『西念極楽願往生歌小解』 一冊 S 53・9
『和訳黒谷上人語灯録』 十二冊 S 56・3

『黒谷上人語灯録概説』

一冊 S 56・5

『円光大師後伝随聞記』

六冊 S 57・1

『選沢集尋源抄』

一冊 S 57・3

『法然上人行状の古訓説』

一冊 S 57・5

『法然上人行状私考』

一冊 S 57・7

『古類聚浄土五祖伝』

二冊 S 57・9

『阿弥陀経讃礼』

一冊 S 58・9

『法然上人和歌集小解』

一冊 S 59・1

『再訂蓮生法師集私註』

一冊 S 59・4

『新和歌集に
収載せる
下野歌人集』

一冊 S 55・5

『勅撰集に
入集せる
下野歌人集』

一冊 S 59・6

『宇都宮歌壇全歌集』

三冊 S 59・8

『前長門守時朝入京田舎打聞集』

一冊 S 59・9

『新和歌集全註釈』

四冊 S 60・1

『宇都宮歌壇叢書』

四冊 S 60・4

(一) 蓮生法師集、信生法師集

(二) 沙弥蓮瑜集

(三) 前長門守時朝打聞集、新和歌集一・二

(四) 新和歌集 3・10

『新和歌集註釈』

五冊 S 60・9

『新和歌集補註釈』

二冊 S 61・1

『前長門守時朝入京田舎打聞集註釈』

二冊 S 61・4

『再訂宇都宮歌壇叢書』

五冊 S 61・8

(一) 蓮生法師集・信生法師集

(二) 沙弥蓮瑜集

(三) 前長門守時朝打聞集・浄意法師集

(四) 新和歌集卷一・七

(四) 新和歌集卷八・十、新和歌集補

『新和歌集索引』

一冊 S 61・10

『法然上人行狀成立攷』

一冊 S 62・1

『法然上人伝記(九卷伝)成立攷』

一冊 S 62・3

『延宝述懷抄』(舜昌法印撰)

一冊 S 62・5

『法然上人御伝(四十八卷)伝成立攷』

一冊 S 62・6

『法然上人御伝の古訓読』

一冊 S 62・9

『法然上人和歌集
浄土和歌集』

一冊 S 62・9

『参考空也上人絵詞伝』

一冊 S 62・11

『註解法然上人和歌集』

一冊 S 62・12

『註解浄土和歌抄』

二冊 H 1・4

『平安朝浄土教漢讀と和讃』

一冊 H 1・6

『尊円法親王往生至要抄御和歌集』

一冊 H 1・9

『法然上人に帰依した坂東武士』

一冊 H 1・10

『阿弥陀経礼讀』

一冊 H 1・12

『成覚房幸西の一念義』

一冊 H 2・1

『選択集古本攷』

二冊 H 2・4

『図和字選択集』

二冊 H 2・5

『元久鈔選択集
十六章図攷』

一冊 H 2・6

『知恩院本
復印 法然上人御伝』

四冊 H 2・9

これらの著作の数を数えてみると実に六十八部一三四冊にものである。又これらの書名のみから考えられる念仏信仰への経緯を見ると、当初は先生の現

在居住している宇都宮の出身で、しかも法然上人晩年の弟子である宇都宮頼綱蓮生に索かれ、次いで『一言考談』を読み、やがて向阿証賢の「三部仮名抄」へと進み、それと同時に栃木という地理的な関係から浄土宗の中でも関東から東北地方に流布した大沢の円通寺を本山とする浄土宗名越派に関心を持たれたようだ。

その後になって法然上人の御法語や、その主著である『選択本願念仏集』を取り挙げ、法然上人の念仏信仰の核心に迫ろうとしている。法然上人の伝記を取りあげたのがその後になっているのは、御法語や『選択集』を正確に読み取る為には

法然上人を取り巻く環境を理解することが必要と考えられたのではなからうか。

その後宇都宮歌壇に進んでいるのは、先生が浄土信仰に帰依した最初に関心を持たれた栃木という土地にゆかりのある宇都宮蓮生へ回帰して行かれたものと思われる。その後の多くはそれ迄に確認した関連文献の内容を一々考証し、問題点の検討を進めているように受けとれる。

以上のような経緯に対する見方が妥当なものとするれば、先生の念仏信仰は単なる思いつきでないことは言う迄もなく、しかも浄土宗の信仰の受けとめ方そのものが実に学僧的なものであったようであ

る。それは先生が長年に亘って育んで来られた漢学者としての素養と、そのお人柄によるものではないかと思われる。

それは兎も角、先生が浄土の念仏信仰にたどりつく迄の道程を見ると、善導大師が『観経疏』に念仏信仰者がお念仏を称える時、必らずそなえるべきであるとして説く「三心積」の中、第二の「深心積」のことが自ずと想い浮かぶのである。先生は最初に漢学を収め、そして禅に取り組んで自らの限界を明確に認識されている。それはまさに「信機」への道程そのものであったのではなからうか。その後を得た「信法」がどのような性格の

ものであったかは、先に記した先生の二十数年間に亘るたゆまぬ努力と精進の結晶である著作が如実に物語っている。

人生の後半にさしかかった時、全ての人が模索し方向を定めてそれぞれの人生を全うして行くのであるが、その残された時間を自らの見定めた一つの方向に向って、これ程見事に消化し切れる人はあまり多くはない。それだけに私達が後半生を迎え、そしてその日々を送るに当たって、示唆する所がまこと大きいように思われる。しかもその原動力になっているのが法然上人の念仏信仰であったというのが尚一層尊く感じられるのである。

季語やぶにらみ (八)

師走あれこれ

木下隆一

(随筆家)

十二月に入ると、テレビ・ラジオからはしきりに「シワス」という言葉が流れ、新聞の紙面には「師走」という文字が躍る。躍るという表現は多少オーバーかなと思うが、この文字を見ていると、私には歳末、狂騒曲の音符

のように見えてくるし、「シワス、シワス」と連発されると、馬鹿の一つ覚えみたいにはざくんじゃないよ、と耳を塞ぎたくなる。どういう訳か、私はこの「シワス」という発音に馴染めないのだ。初めてこの字を覚えた時、

「シハス」と振り仮名がしてあったからか、それとも生まれ育った関西以西の地で、「シワス」という発音を聞いた覚えがないからだろうか。そう考えると、これは江戸弁かと思ったりするが、いま一つはつきりしない。

どの辞書も「しはす」で引くと、「しわす」を見よと矢印がしてある。「しわす」を引くと、「師走。陰曆十二月の異称。極月（ごくげつ）」とあって、なぜ「シハス」が「シワス」に転じたかについては一言も触れていない。「日本国語大辞典」（小学館版）によれば、我が国の文献で「シハス」の初出は「日本書紀」で、

神武天皇即位前（北野本室町訓）「十有二月（シハス）の丙辰朔壬午のひ」、仁徳六十二年（前田本訓）「是より以後、季冬（シハス）に当

る毎に必ず氷を蔵（おさ）む」

を例に引いている。そして更に、「万葉集」卷八（二六四八）の「十二月尔者 沫雪零跡 不知可毛 梅花開 含不有而（しはすには あわ雪降ると 知らぬかも 梅の花咲く ふふめらずして）」という紀少鹿女郎の歌を挙げて、いろいろな文字に「シハス」と当てていたことを示唆している。「日本書紀」が漢文体で書かれたものだから仕方ないにしても、「万葉集」に万葉仮名で「之波須」とでも記してくれていたなら、「シワス」に転化して私を悩ますこともなかったであろうに。

「シハス」のみならず、月名の異称は和語なのか外来語なのか？ 「竹取物語」のつまだひの段に、「わび歌など書きておこすれども、かひなしと思へど、霜月・師走の降り凍

り、水無月の照りはたたくも、障らず来たり」とあるところを見ると、多分和語であろうと思うが確証はないし、また、いつの時代から師が走るという字を当てるようになったのかも定かではない。「日本国語大辞典」には、

(1) 経をあげるために師僧が東西を馳せ走る月であるところから、シハセ（師馳）の義。
(2) 四季の果てる月であるところから、シハス（四極）月の意。

(3) トシハツル（歳極・年果・歳終）の義。

(4) ナシハルツキ（成終月）の略伝。

(5) 農事が終わり、調貢の新穀をシネハツル（歟果）月であるところから。

(6) 稲のない田のさまをいうシヒアスの約。シは発声の助語。ヒアスは干令残の義。

(7) シヲヘヲサメヅキ（為竟取月）の義。

(8) セハシ（忙）の義。

(9) シバシ（暫）の月の義。以下略

と、諸説を列挙しているが、いずれも牽強付会の感は否めない。紀少鹿女郎の和歌の頭注（岩波書店刊「万葉集」）に、「十二月〓シハスの語源は未詳。シが年を意味し、ハスはハツと同じか」とあるように、気楽に考えて、あまり深追いしない方が賢明なのかもしれない。師走歩道橋上夕日に射抜かるる

永井東門居

近ごろ盛り場を歩いて感じるのは、ジングルベルが殆ど聞こえてこなくなったことである。二昔ぐらい前までは十二月になるのを待ち兼ねたように、このメロディーが巷に氾濫

したものだったが……。元々は童謡である
「そり遊びの歌」を、あたかもクリスマス
歌であるかのように錯覚させたのは本家の
アメリカ人が、それを歳末大売出しの景気
づけに使った日本人の才覚もまたなかなか
のと言わねばなるまい。確かに、あのシャ
ン／＼、シャ／＼／＼という鈴の音に
は、聞く者の気分を高ぶらせて購買意欲を助
長する効果があったが、大売出しやバーゲン
セールが日常茶飯事となった昨今では、その
神通力も薄れてしまった。

昔、放送会社で番組制作に携わっていたこ
ろ、ある年の暮、入社二年目の若いアナウン
サーを同道して、正月特集番組の取材に奥多
摩へ出掛けたことがあった。東京都内であり
ながら、奥多摩は交通の便が悪く、目的地に

着くのにはほぼ半日を要した。土地の古老に
放送時間にすれば僅か二、三分話を聞くだけ
のことで、電話インタビューでも事足りたの
だが、このアナ君入社以来一度も出張したこ
とがないというので、何だかんだと理由をつ
けて出張稟議書を書き、一泊の取材旅行に連
れ出したのであった。アナ君に感謝されたの
は言うまでもないが、実を言うと、私が骨休
めをしたかったのである。

「君のいいようにやれ」

と突き放し、インタビュ어의一切を彼に任
せて、私は専ら冬の奥多摩の風物を楽しんだ。
物見遊山の短い旅だった。若い彼には初めて
の経験だったらしく、仕事を終えて、青梅線
御岳駅近くの鉱泉宿に落ち着くと、

「あんなものでよかったんでしょるか」

と、不安そうに尋ねた。

「いいんだよ、あれだけあれば充分だ。君が頑張って三十分以上も話を引き出してくれたんだもの」

「何だかまとまりがなくて……。申訳ありません」

「何も謝ることはない。人と人との出会いなんて、そんなものじゃないか？ なまじっかシナリオがあつたりしたら不自然だろ」

「それはそうですが、あの中から三分にまとめるとなると大変でしょ」

「心配するな。たかが十分の一に縮めるだけじゃないか。俺は編集のプロなんだよ」

事実、その時すでに私の頭の中では編集は終わっていた。後は録音テープに録入を入れ、繋ぎ合わせる作業が残っているだけであつた。

「今夜は二人だけの忘年会としやれようじゃないか。この地酒、案外いけるぜ」

そう言つて、箸袋の裏に「今日一日（ひとひ）ジングルベルは聞かざりき」と書いて示すと、アナ君しばらくそれを眺めていたが、「そう言えばそうですねえ。今日は一度も聞いていませんねえ。いつの間にか音に対して不感症になつてたんですねえ」

と、いかにも感に堪えないといった面持ちで言つた。座席で書いた俳句のおかげで、以後彼は私を詩人として遇してくれた。そして退社後も毎年律儀に年賀状を呉れている。

ジングルベルの衰退と軌を一にするように、クリスマスの馬鹿騒ぎも終焉した。その道に詳しい男の話だと、第一次オイル・ショック辺りから始まつた現象で、キャバレーという

ものが盛り場から消滅したからだと言う。偶然夜の渋谷駅で、十数年振りに出会ったその男は、

「あの馬鹿騒ぎってやつは、一種の忘年会だったんでしょね。昔はいまごろの時間だとこの辺は酔っ払いの天下だったんだが……」
と、周囲を見回して言った。

「我々の若いころと違って、遊び自体が多様化したということもありますが、もう一つ、住まいと職場が離れすぎてるってのも原因じゃないですか。職場まで片道二時間なんて人は、おちおち都心で酒飲んで騒いでいられないじゃないですか」

言われてみれば、なるほど今や都内の盛り場でキャバレーのネオンを見付けるのは困難である。

天に星地に反吐（へど）クリスマス前夜

西島麦南

良し悪しは別にして、師走の夜の風物詩だったこんな風景も、いまではすっかり過去のものとなってしまったようだ。

私が勤めていた放送会社には労働組合がなかった。だから会社お手盛りの年末賞与を受け取るだけで、赤旗を立てて年末闘争をやった経験はない。いつも、こんなに働いたのにこれだけかという不満はあったが、越年資金とか越冬資金といった切羽詰まった感覚は、私等にはなかった。ただ、給料が銀行振込みになった後も、賞与だけは手渡しだったのは有難かった。

かぞふより賞与一束忽（こつ）と消ゆ

清水基吉

という時もあったが、

懷にボーナスありて談笑す

日野草城

と、ささやかなリッチな気分にも浸れた。

いまでは事前に労使交渉が妥結するのか、

京浜工業地帯を電車で通り抜けても、赤旗が林立して年末闘争真っ最中といった光景にはとんとお目にかかれなくなった。第一、JRの車両が見違えるほど綺麗になった。国鉄時代の師走の車両には、ビラやステッカーが所かまわずべたべたと貼られていたものだった
が……。

「年末闘争」「年末賞与」の季語が消える日は案外近いかもしれない。

ジングルベルに代わって、郵便局の広報車

が、「年賀状はお早めに……」と、しきりに師走の気分をせっつく。早々と十一月一日に三十八億枚もの年賀葉書を出してにおいて、早く書けないもんだと思うが、今年は十二月二十五日までに出せば、元旦に届くという。去年は確か二十二日がリミットだったような気がするが、この三日の差はどうやら公職選挙法の改正で、国会議員の有権者宛の年賀状が禁止されたために生まれた余裕のようである。書くのは億劫だが、元旦どかつと年賀状が届かないとやはり淋しい。人間とは勝手なものだと思つづく思うが、元旦から汗して配る郵便局員やアルバイトの皆さんには、取り敢えずお礼を申し上げておく。それにしても私はまだ文面を決めかねているのだ。

(この項終わり)

話
の
旅
(五)

超
常
物
語

②

まつ
うら
ぎょう
しん
松
浦
行
真

(浄土宗出版室長)

ガダルカナルの激戦地の一つギフ高地
へは、ソロモン・アイランズ国の首都ホ
ニアラから少し東北へ入って、小高い丘
陵にあるバラナ村を経由して行く。村と

いつでもそんな大それたものではなく、
ほんの二軒か三軒がかたまったような、
日本という小字みたいな集落である。
そのピーターという現地人を道案内

に雇って、入って行った。

ご多聞にもれず、ここでも一たん谷底に降りて、そこから上がってしばらく行くと森が終わり、広闊な草地が開ける。

するとその草地の右手に、木も何も生えていないずんべらぼうの小高い丘が見えてくる。それがギフ高地であつた。ギフ

高地はヴァットマンヒルとシーホース高地と隣あつていて、もう手の届くような近さにあるのだが、これがまた例によつて谷底まで急降下しており、しかもその

谷は密林に埋まつていて、安直には向かうの高地に行けない地形になっている。

この三つの丘はいずれも死闘が繰り返されたところだが、この付近一帯を守っていたのは名古屋の第三八師団第二二九

連隊だつた。これはもと岐阜県にあった連隊で、ギフ高地のギフは岐阜県の岐阜からきている。ソロモン国の公式な地名が、日本軍ゆかりのものからとられた例はほかに知らないから、これは珍しい部類にぞくするのではないか。

そこに立つて四十五年前に演じられた戦闘をしばし偲んだのだが、よく見ると高地一帯の土が妙に赤っぽい。

だいたいガ島は海底火山の噴火でできた島だから、黒っぽい土が多い。ただ奥地に入ったとき、どこかで一個所、粘土のような赤土を見た記憶がぼんやりとあるのだが、それにしてもこんなあざやかな赤土は初めてであつた。

その理由が、ピーターに聞いて初めて

わかった。土が赤いではなかった。アメリカ軍の放った砲弾がさく裂し、その粉々になった破片が錆びて、その錆びに全高地が赤く染まっているのだった。丘の形も変わったらしいと、古老の言をピーターが伝えてくれた。日露戦争のときの旅順攻略で、二〇三高地の山容が「ために改まる」というのは、単なる詩的形容でないことを、私はガ島にきてはじめて実感したのだった。

ギフ高地からの眺望を取材しているうち、私はトイレがしたくなった。いくらなんでも四方まる見えの頂上でするのは気がひける。そこでやむなく高地を駆け下り、森の前縁まで行き、いざしようと思つてギョッとなった。人骨が目に入っ

たからである。ミミズにひっかけてもおちんちんがはれるというのに、人骨なんて滅相もない。クワバラクワバラと一メートルほど横にずれてみたが、見るとそこにも落ちている。びっくりして周囲を見まわすと、なんとそこら中、ホネだらけなのだった。これには私も、さすがに凝然となった。

しかし、ここで手間どっていてもしかたがない。私は草地から森に入り、さつき通った谷底へと下って行った。そこには細い小川が流れており、丸木橋が一本、渡してあるのを思いだしたからである。

私は丸木橋の上から用をたし、高地にもどつて、四方の写真を撮りまくつてい

る金子君に言った。

「おい、気をつけろよ。下の草地はホネだらけだ。うかうか小便もできやあしない」

「おや、ホント？」

と言いながら、金子君は辺りを見まわしていたが、つい足もとの、長い歳月に型崩れがしてしまっているタコツボ（個人壕）にも、ホネが二つ三つ、むきだしになってころがっていた。おどろいた金子君が、

「こりゃあ、たいへんだあ」

と言いだし、その気になって見てみると、ホネの数は下の草地よりも、この高地のほうが多いくらいであった。

ホネといっても、頭蓋骨のそれとか肋

骨といった、そんなやわらかいホネはない。いずれも大腿骨とか上腕のホネとい

った、大きくて頑丈なものばかりである。よく牛のホネかなんぞをくわえた犬の絵があるが、あれに描かれているような、両端が丸くてやや大きいめになった、あの形のものだ。やわらかいホネはたぶん、風化してしまったのであろう。

そんな話を金子君としてみると、ピーターが、

「あなた方がいま話をしているのは骨のことか」

と、ビジン・イングリッシュで話かけてきた。「ビジン・イングリッシュ」とは「ビジネス・イングリッシュ」が訛ったものである。商取引き上の必要から白

人と原住民が生みだした英語で、ひろく南太平洋一帯で使われている。原住民の言葉の訛りがそのまま乗り移っているから、そのひどい訛りに最初はとまどうが、馴れれば、ただ単語を並べればいいだけのものなので、この領域の共通語となっている。私のような英語ベタにも、いたって便利な言葉である。

ともあれ、ピーターがそう聞くので、「そうだ、ホネのことだ」

という、

「それなら珍しいことではない。部落の入口に積んである」

「それは気がつかなかった」

「では帰りに見るといい。教えてあげよう」

となった。

ギフ高地の取材を終えて、やがて私たちは丘を降りた。元きた道をたどりバラナの集落に入ると、ピーターが一本の椰子の木の下のつれていった。

なるほど、まぎれもなくホネである。

それが小山のように積んである。私はもう一度、びっくりした。そして一巻の経を誦し、供養をしたあと、ピーターに聞いた。

「こんなものを村の入口に積んでおいで、気味が悪くはないのか」

「べつに——」

と、ピーターは手短に言った。もともと口数の少ない男だった。

「怖くはないのか」

「――？」

「幽霊のことだよ」

「幽霊ならときどきでる。夜なかにヘイタイたちがラッパを吹いて通る」

意外なことを、サラッという。

「見たのか」

「いや、見ない。声だけが聞こえる」

ガ島の原住民の家は、屋根は大きな葉っぱで葺き、壁にあたる側面も、丸太を縄か蔓で柱にくくりつけただけの、通称ニッパハウスと呼ばれるものだ（丸太が何の木で、葉っぱを何といったか、メモ書きがあったのだが、しまい忘れて見つからないので、しばらくこのままにしておく）。だから外をうかがおうと思えば、いくらでもスキ間から覗くことができる造りなのであ

る。

しかし「見ない」と「見えない」には千里のへだたりがある。けれどもこの違いは、ついに私には突き止めることができなかった。

ただわずかだが、ピーターの話に若干の疑いをさしはさもうと思えば、さしはさめる。それは「兵隊さんがラッパを吹いて通った」というくだりだ。これは戦時中、全滅した部隊の因縁話などを語るさいに、よくでてくる典型的な様式でもある。

ひるがえってピーターは、ガ島を訪れる遺骨収集団や遺族の慰霊団のガイドを、何度も勤めて来た人である。

そこから、こんな想像もうまれてくる。

——ひょっとしたら、それは、その日本から来た遺族団に聞いた物語を、ピーター自身がなぞって、語っているのかもしれない。

けれども、この想像は間違っているかもしれない。

“様式化された話”と思うのは、幽霊の足はおおむね見えないのと同様、怨念をもった全滅部隊はそういう形でしか出てこないのかもしれないからだ。そのへんのところは私は専門家ではないのでよくわからないが、要するにピーターは本当に、“ヘイタイたちがラッパを吹いて通る”のを聞いたのかもしれない。とすれば、このピーター談話は相当に凄味をおびてくることになる。

私は彼に、あらためて、

「怖くはないのか」

と、たずねた。

「怖くはない。日本人はわれわれとは違うから」

彼らの宗教は、現代では新旧のキリスト教である。ガ島の現地人は肌の黒いメラネシア人で構成されているのだが、いずれも「ピーター」といったたぐいのヨーロッパ風の名前をもっている。これらはいずれもクリスチャン・ネームだ。

キリスト教以前の彼らの宗教は、呪術を中心とした原始宗教である。これについては現地で聞いた、惨殺された者こそ災難としかいいようのない陰惨な殺人事件があるが、じつはこれが、マライタ島

の呪術師によって指示された呪術殺人事件なのである。しかしこれは機会があれば、語ることにしよう。

ただ私がガ島に渡ったのは昭和五十年代の半ばだが、その時期を起点として、過去十年間にわたり、殺人事件などという物騒なものは皆無の平和な島だったことを記しておこう。それ以後のことは知らないが、おそらく血なまぐさい事件などとは無縁の静穏さが続いているものと思う。(現代ではキリスト教の普及とともに、「呪術」という言葉そのものすら彼らの間でタブーとなっているようだ。)

余談はさておき、宗教が違い、民俗が違えば、こうも異民族の人骨にたいして、無関心になれるものかと、私はその

ことのほうに一種の驚きを感じたことである。実際、ピーターの日本兵の遺骨に対する態度は、ふつうの他のモノにたいする態度と、少しも変わるところがなかった。

バラナ村からさらに奥地へと取材を続け、そしてホニアラにもどったとき、私は人骨のことやラッパの話を、私たちの世話万端を仕切ってくださっている、当時のソロモン大洋漁業の支配人本田寿夫さんに会った。すると本田さんは、意外な事実を打ち明けてくれた。そのことを次回に語ろう。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願ひ

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。左記のコーナーを設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十六巻 十二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成二年十一月二十五日

印刷

平成二年十二月一日

発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷 鈔

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒(三) 振替東京八一八二一八七番

◇◇ 平成三年用新版 ◇◇

浄土宝暦

発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
年末年始の好便な檀信徒用施本として、広くおすすめいた
します。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ページ以上 特価60円)

送料実費 (300ページ以上はサービスします)

.....お申込み.....

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8-82187